

（実践報告）

円滑な接続のための幼小連携のあり方

～ 勤務園のカリキュラムづくりを通して～

青柳 紘子（北海道教育大学附属旭川幼稚園）

I. 問題と目的

2006年の教育基本法改正や、2007年の学校教育法改正により、幼児期の教育の理念や目的が明記されるようになった。さらに、2017年改訂の幼稚園教育要領や保育所保育指針には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記され、小学校以降の教育とのつながりが強く求められるようになってきた。文部科学省（2022）「幼保小の架け橋プログラムの手引き（初版）」では、幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムと小学校1年生のカリキュラムを一体的に捉え、地域の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを目指して、「幼保小の架け橋プログラム」が推進されている。さらに、勤務園においては小学校との連携を進めているが、5歳児担任が1人で仕事を担っている、連携が子ども同士の交流活動にとどまりカリキュラムが整備されていない、他職員に活動内容を共有されていないなど、幼小連携が充実しているとは言えない状況にある。

これらのことを踏まえて、勤務園と小学校との円滑な接続のために、勤務園の幼小連携担当者として幼小交流活動や連携会議に参加したり、5歳児のカリキュラムを小学校への接続が見えやすいように改善したりすることを通して、勤務園と小学校との連携のあり方を明らかにしていくことを目指した。

II. 先行研究

秋田（2002）は、幼小連携をデザインする原則として、「互恵性」、「継続性」、「名づけ合う関係性」、「物語り性」の4つを挙げている。「互恵性」については、「教える立場と教えられる立場」、「世話する者とされる者」といった一方向的関係ではなく、連携

する双方にとって意味のあるものでなければならないということ、「継続性」については、継続することではじめは一方しか見えなかった関係から、多様な関係が生まれるというよさがあるということ、「名づけ合う関係性」については、名前が見える関係、名前を分かり合える交流や、共に名前をつけていく交流を行うということ、「物語り性」については、実践が次に何を生み出していったのかという展開過程をとらえながら、次をデザインしていくことであると述べている。この4つの原則のうち、特に「互恵性」は2006年の教育基本法改正や、2007年の学校教育法改正により、幼児期の教育の理念や目的が明記されるようになった。さらに、2017年改訂の幼稚園教育要領や保育所保育指針には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記され、小学校以降の教育とのつながりが強く求められるようになってきた。文部科学省（2022）「幼保小の架け橋プログラムの手引き（初版）」では、幼児期から児童期の発子ども同士の交流に欠かせないものである。5歳児にとっても1年生にとっても意味のある活動にするために幼稚園と小学校とが協働していかなければならない。

酒井・横井（2011）は、異校種・異機関の職員同士が話し合う上でファシリテーターの役割が重要であり、ファシリテーターの担当者は、幼稚園教育要領や小学校学習指導要領、幼稚園・小学校それぞれの実践やその背後に流れる保育観・指導観や子ども観をよく理解しておく必要があると述べている。5歳児担任は小学校での学習や生活の様子、1年生担任は幼稚園での遊びや生活の様子を具体的にイメージできないということが予想されることから、話し合いの場では、5歳児担任・1年生担任それぞれの発言を相手に分かりやすいように言い直したり、考

え方の整理をしたりすることが求められる。

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校(2006)は、子ども本来の力が大きく伸びる幼稚園・小学校をつくること、子ども主体のカリキュラムのもとに、然るべき教育を行うことを目指し、幼稚園と小学校をなめらかにつなぐ「接続期」を設けた。幼稚園から小学校への移行の時期には、ハード面(時間の概念が異なっていることや教育の独自性があること)で段差があるのはやむをえないが、ソフト面(カリキュラムや環境構成)ではなめらかにつながるよう、前期・中期・後期の3つに分けた接続期を設定したと述べている。これは、現在も各自治体や施設がつくるカリキュラムに生かされており、「幼保小の架け橋プログラム」の「架け橋期」の前身である。5歳児のカリキュラムをつくる際にも、「この時期の子どもに育てたいことは何か」を意識し、ねらいや内容を考えていく必要がある。

Ⅲ. 研究の方法

本研究では、以下の3点について取り組んだ。1点目に、北海道や上川管内、旭川市の幼小連携に関わる教育方針を整理し、それを勤務園の経営方針に照らし合わせ、勤務園が地域で求められている幼小連携を行っているのか分析した。2点目に、勤務園の連携担当者として、幼稚園と小学校の職員が参加する「連携会議」に参加し、成果と課題を整理した。筆者の小学校と幼稚園での勤務経験から、両者の教育や生活を明確にイメージでき、両者をつなぐような発言をすることができると考えたため、連携会議の際には、ファシリテーターのような役割を担うことを意識した。3点目に、5歳児と1年生との交流活動である「幼小交流活動」に参加し、成果と課題を整理した。交流活動後、子どもの姿を軸に活動を振り返るために、幼小交流活動では活動全体を見ることと、子どもの姿を捉えることを意識した。4点目に、連携会議や幼小交流活動を生かし、小学校入学を見通した5歳児の1年間のカリキュラムを作成した。

ここでは紙面の都合上、実践の骨子である2点目から4点目についての結果と考察を述べる。

Ⅳ. 実践の結果と考察

1. 連携会議

連携会議では、主に幼小交流活動の計画を立てた。連携担当者である筆者がコーディネーターのような役割をし、5歳児担任と1年生担任の考えをすり合わせながら協議を進めた。全4回の会議の中で意識したことは、「互恵性」と「継続性」である。どちらか一方にしかメリットがない活動では継続していこうとする意欲は生まれないので、両担任や子どもたちにとって意味のある活動になっているか確認しながら協議に参加した。初めのうちは、両担任とも遠慮しながら発言しているようであったが、次第に教育や保育への思いを交えながら発言する姿も見られるようになった。また、第3回と第4回の連携会議では、冒頭に幼小交流活動の振り返りを行い、反省点を次の幼小交流活動に生かせるようにした。

連携会議での成果を2点述べる。1点目は、連携担当者がコーディネーター役を担ったことで、協議がスムーズに進んだことである。幼稚園と小学校の教育や生活の違いから、担任同士の考えがずれる場面があったが、連携担当者が両担任をつなぐような発言をし、イメージを共有することができた。2点目は、幼小交流活動を日常の学習や保育と結びつけるようなねらい(目標)や内容を計画したことで、「互恵性」と「継続性」のよさを共有できたことである。5歳児にも1年生にも学びがある活動を計画すると交流活動への意欲が高まり、次の交流活動のアイデアも浮かんでくる。さらに、日常の学習活動や保育に幼小交流活動を組み込むことで、計画や準備にあまり時間をかけなくてすむ。これらのことは、次年度以降も継続していく上で重要なことであると考えられる。

一方で課題として挙げられるのは、互いの教育や保育、子どもの育ちなどについて話し合う時間が少なかったことである。互いの教育や保育を知り、子どもの育ちを共有することで、よりよい幼小交流活動を計画できるとともに、日常の教育や保育に生かし、よりよい幼小連携へとつながっていくのではないだろうか。

2. 幼小交流活動

全3回の幼小交流活動には、「互恵性」があるかということやねらい(目標)に沿った姿が見られていたかということ視点を以て参加した。

初めての幼小交流活動は、1年生が「5歳児のお世話をしなければ」と意気込み、「お世話する者とさ



図1 第1回幼小交流活動の様子

れる者」のような一方的な関係が目立った(図1)。

第2回幼小交流活動では、幼稚園をフィールドとしたため、5歳児が1年生に遊びを教えたり、1年生が遊びを発展させたりする様子が見られ、多様な関係が生まれた(図2)。



図2 第2回幼小交流活動の様子

第3回幼小交流活動では、名前を呼び合って会話したり、また一緒に遊びたいという思いをもったりする様子が見られた(図3、図4)。



図3 第3回幼小交流活動 遊びの様子



図4 第3回幼小交流活動 給食の様子

5歳児は、小学校で活動したり、給食体験をしたりすることを通して、小学校への興味を高めたり、入学へ期待をもったりする姿や発言が増えていった。

そして、幼小交流活動後には、必ず活動中の子どもの姿を軸に園内の職員と振り返りをした。

幼小交流活動での成果を2点述べる。1点目は、幼小交流活動を複数回行ったことで、子ども同士の自然な関わりが増えていったことである。「一緒に遊ぶと楽しい」、「いろいろなことを教えてくれて嬉しい」、「また一緒に遊びたい」などという思いが醸成され、教師や保育者が促さなくても進んで交流するようになっていったのだと考える(図5)。これは、どちらか一方にのみメリットがある関係性では醸成されない思いであると考えられることから、「互恵性」のある活動であったのではないだろうか。



図5 第3回幼小交流活動 帰りの様子

2点目は、園内の職員と幼小交流活動の様子を共有できたことである。幼小交流活動の振り返りは、5歳児担任と放課後の職員室で子どもの様子を交流しながら行った。撮影した写真を見たり、エピソードを話したりしているうちに、幼小交流活動に参加

していなかった職員も参加しはじめ、活動の様子を共有することができた。このような振り返りを行うことで、次年度、担任や連携担当者が変わっても様子をイメージしながら引継ぎを行うことができると考える。これらのことは、幼小交流活動を行う上で重要なことであり、幼稚園と小学校とで共有していかなければならないことである。

一方で課題として挙げられるのは、互いの教育や保育の理解不足である。幼小交流活動では、1年生担任が行う全体指導の説明を5歳児が理解できてい

なかつたり、1年生が幼稚園での遊びや時間の過ごし方に戸惑っていたりする場面があった。互いの教育や保育を知っていれば、よいところを取り入れたり、子どもに寄り添ったりすることができ、よりよい幼小交流活動になったのではないだろうか。

3. カリキュラム改善

5歳児の1年間で小学校へ接続するイメージでつくられた勤務園の「幼小接続期プログラム」を5つの時期に分けたカリキュラムを作成した(表1)。

表1 5歳児 1～3月のカリキュラム(筆者作成)

5歳児 1～3月のねらいと具体的な活動		【主な行事】	・始業式 ・餅つき ・ソリ遠足 ・節分 ・新入園児歓迎会 ・幼小交流活動(冬) ・お別れ会 ・卒園式	
		ねらい	想定される遊びや活動の例	環境づくり 配慮や援助
育成したい資質・能力	気付く力	<ul style="list-style-type: none"> ・冬の自然の変化や生活の変化に気付く。 ・友達のよさや持ち味を認め合って遊びを進める。 ・活動の区切りや時間を意識しながら生活する。 ・共同、共有の場の整理や片付けの必要性が分かり、協力して取り組む。 	【保育室】 <ul style="list-style-type: none"> ・カブラ ・工作 ・折り紙 ・お店屋さんごっこ ・学校ごっこ ・トランプ ・オセロ ・どうぶつしょうぎ ・けん玉 ・福笑い ・かるた ・すごろく ・織機 ・指編み 【遊戯室】 <ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱遊び ・マット遊び ・長縄跳び ・遊戯 ・こま回し ・羽子板 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間同士がお互いの気持ちを考え、相手のよいところを認め合いながら友達との関係が一層充実していくようにする。 ・カレンダーや時計の模型、1日の予定を記したホワイトボードなどを活用し、生活に見通しをもち、自分で必要なことを考えたり、取り組んだりできるようにする。 ・保育室、遊戯室、園庭の掃除や片づけを通して、みんなで使う場所をきれいにする大切さに気付けるようにする。
	考える力	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びに使うものを自分たちで工夫してつくったり、ルールや役割を決めたりしながら遊ぶ。 ・相手の思いや考えが分かり、自分の考えと比べてみる。 ・文字や数を使う楽しさや便利さに気付き、積極的に使ってみる。 	【園庭】 <ul style="list-style-type: none"> ・雪だるまづくり ・色氷づくり ・ソリ滑り ・雪合戦 ・かまくらづくり 【制作】 <ul style="list-style-type: none"> ・書初め ・鬼のお面 ・ひな飾り ・全身画 ・壁面製作 	<ul style="list-style-type: none"> ・気付いたことや疑問に思ったことをみんなで共有したり、絵本や図鑑を保育室に置いたりする。 ・材料や道具をたくさん準備しておき、繰り返し試したり、確かめたりできるようにする。 ・小グループで話し合ったり考えたりする場をつくり、相手の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりできるようにする。
	やってみようとする力	<ul style="list-style-type: none"> ・少し難しいことにも繰り返し挑戦する。 ・1年生になることに、喜びと期待をもつ。 ・友達と考えを出し合ったり、尊重したり、折り合いをつけたりしながら、遊びや活動に取り組む。 ・よいこと、悪いことが分かり、考えながら行動する。 ・友達と共通の目的に向かって取り組み、やり遂げた喜びを味わう。 	【集団遊び】 <ul style="list-style-type: none"> ・缶蹴り ・長縄跳び ・宝探し ・サーキット遊び ・いす取りゲーム ・ハンカチ落とし ・はないちもんめ ・ドッジボール 	<ul style="list-style-type: none"> ・あきらめず挑戦することで上達を実感できるような活動を提案し、自信となるようにする。 ・小学校への不安も受け止めながら、期待や自信がもてるよう、小学校と連携して無理のない交流や体験ができるようにする。 ・お別れ会や卒園式に向けて、協力して取り組んだり、話し合ったりする活動を取り入れる。

これは、現在の5歳児のカリキュラムに、幼小交流活動を位置付け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとにしたねらいを加え、「幼小接続プログラム」とのつながりを分かりやすくしたものである。勤務園で設定している育成したい資質・能力「気付く力」「考える力」「やってみようとする力」や、幼稚園教育要領にある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに、その時期のねらいを立て、環境づくりや配慮・援助事項を記した。さらに、想定される遊びや活動、その時期の行事を記載し、具体的な保育をイメージできるようにした。

V. 総合考察

本研究における成果は2点ある。1点目に、幼小連携担当者が連携会議や幼小交流活動に客観的な立場で参加することで、協議や振り返りをスムーズに進められたことである。担任に任せるのではなく幼小連携に関わる組織をつくることで、多様な見方ができたり、情報を共有しやすかったりという利点があった。2点目に、「互恵性」や「継続性」の重要性を理解できたことである。5歳児にとっても1年生にとってもメリットのある交流活動を構築し、年間を通じて継続的に行うことで5歳児と1年生をつなぐカリキュラムに生きてくると考える。

一方、課題は職員間の連携不足である。連携会議だけでは、関係性が深まらず、互いの教育や生活の理解も進まなかった。そこで、互いの授業・保育を参観する機会や職員の合同研修会を実施するなど工夫し、職員同士がいつでも相談しあえる関係づくりを目指していきたい。

今後も、勤務園での幼小連携について実践を深め、旭川市内の幼児教育施設や小学校に情報を提供したり、幼小連携のモデルを示したりしていきたい。また、筆者が小学校勤務に戻った際には、幼稚園での経験を生かしたカリキュラムや授業づくりに取り組んでいきたいと考える。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2006 改正). 「教育基本法」
- 2) 文部科学省 (2007 一部改正). 「学校教育法」
- 3) 文部科学省 (2017 改訂). 「幼稚園教育要領」
- 4) 厚生労働省 (2017 改訂). 「保育所保育指針」
- 5) 文部科学省 (2022). 「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」
- 6) 秋田喜代美 (2002). 「第1章 連携の理念とデザイン」『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例』 pp. 10-28
- 7) 酒井朗, 横井紘子 (2011). 「第6章 保育者と小学校教師の交流」『保幼小連携の原理と実践』 pp. 95-113
- 8) お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校 (2006). 「第3章 接続期の設定とその意味付け」『子どもの学びをつなぐー幼稚園・小学校の教師で作った接続期カリキュラムー』 pp. 18-25

『教育への扉』竹谷出版学術ジャーナル

第3巻, 第4号

発行日: 2024年3月21日

発行元: 竹谷出版 (竹谷教材株式会社出版事業部)